ヨシ原料に紙、循環型の地域、県産材で箸

自然と経済 共生探る

県内経営者ら紹介

福井で環境フェア

来秋本県開催の「SATOYAMAイニシアチブ国際パートナーシップ」定例会合のキックオフイベントとして位置付けられた「ふくい環境フェア2012」（県など主催）は最終日の13日、「環境トークステージ」が福井市のアオッサで行われた。人と自然の共生方法など4タイトルで専門家が講演。受講者は環境の大切さに理解を深めていた。（坂下享）

自然と共生したビジネスの可能性を探った講演会＝13日、福井市のアオッサ

「里山ビジネス奮闘記」と題した講演会では、エコ商材ネット販売などのエコトワザ（東京）経営の大塚玲奈さんをコーディネーターに招き、県内で環境と共生した事業を展開する経営者3人がパネリストとして自らの事業を紹介した。

山田兄弟製紙（越前市）の山田晃裕さんは、刈り取り後の活用法がなかった植物ヨシが原料の紙づくりを展開。「環境に優しいだけでなく、顧客の要望に応える形づくりが重要」と、地道な見本づくりが販路拡大につながったことを紹介した。

「おけら牧場・ラーバンの森」（坂井市）の山崎洋子さんは、キク栽培で農薬に疑問を感じ、環境に優しい農業に転換。住民を巻き込みながら資源循環型の地域づくりに取り組んでいる。「米飯食が陰りつつあるが、水田が環境を守り、それで多様な食文化が保たれることを忘れてはいけない」と警鐘を鳴らした。

フナイワークス（小浜市）の船井達之さんは、県産材を使った箸を数年前から製造している。安価な外国産材でなく、原点回帰が重要として「地元の材を使って仕事を増やし、本来の姿を取り戻すことが産地と地域再生へつながる」と訴えた。

大塚さんは「3人のビジネスは、里地里山の素材とうまく付き合っている」と総括。環境重視と効率化のバランスの極意に触れた受講者は、経営者たちに熱心に質問をぶつけていた。

フェアではこのほか、環境保全に取り組む県内団体の紹介や、バイオディーゼル燃料で走るカートの走行体験などがJR福井駅周辺であった。

九頭竜川を環境や歴史、民俗の分野から探求した特別講演＝13日、永平寺町の県立大福井キャンパス

環境や歴史 九頭竜川を

県立大 プロ

県立大は13日、九頭竜川を多方面から研究し、古里を見つめ直す創立20周年記念事業「九頭竜川プロジェクト」をスタートさせた。特別講演を永平寺町の福井キャンパスで行い、環境、歴史、民俗の3分野から九頭竜川を探求した。

プロジェクトは、農業、